

「週刊読書人」詩時評 一九九二—一九九三年 清水鱗造批評集 第一分冊

灰皿町

「週刊読書人」詩時評（一九九二年）

集積回路としての詩——佐々木幹郎と荒川洋治の詩集

性交からずり落ちていくもの——伊藤比呂美＋上野千鶴子『のろとさにわ』（平凡社）

新しく「掘る場所」——吉本隆明・「ジライヤ」

浮いている場所——吉増剛造『死の舟』

夕暮れ時と適度な快樂——永島卓と白石かずこの詩集

街の位相——吉本隆明『大情況論』、尾崎豊

言葉に下ろす手斧——倉田良成『私の洛中洛外図から』、井上瑞貴

イメージの治癒と逸脱——江口透の詩集ほか

熱い言葉の意味——渋谷孝輔『綺想曲』、「出来事」

時間への留保の感覚——辻井喬『群青、わが黙示』

物語の香り——辻仁成『屋上で遊ぶ子供たち』

小さな喜び——北川透と高橋睦郎の詩集

一九九二年回顧——出発地点を鮮明に表わす詩の出現　せめぎあいを演じる「開く」と「封じる」

集積回路としての詩

——佐々木幹郎と荒川洋治の詩集

詩は、部分でありまた全体であるようになっていく。縮小してまたその極限で拡大する。だから一篇の作品に向かって収束する光もあるし、無限に光芒を放つ核を持つてもいる。集積回路を作るのが上手な日本人が、細部における艶や切れ味を得意にするのは自然の理だ。背理を意識する暇もなく、細部に集中しまたそこから逆方向に向かうであろう光を常に求めつづける。しかしまたその作業には断層があるのを、詩人自身が気づいていく。その断層は、例えば「文芸的」というセンスに欺かれているのではないか、というような疑問である。まず自分が提出しそれを読者が認めたという回路とまたそれと逆の回路を、刻々と意識していく。その意味において詩は一回限りの業なのだ。

佐々木幹郎『蜂蜜採り』（書肆山田）と荒川洋治『一時間の犬』（思潮社）は、共に旅の味を感じさせる詩集なのだが、細部の作り方においてそんなことを考えた。両者のエッセイ集を読む読者とそうでない読者では、言葉の受け取り方は違うのは当たり前で、細部であり全体であることが詩であるということからいえば、当然両者は作品一篇に賭けている。断裂的な技法（例えば千字で表わした考えの最後の十字を置いてみるという

ようなやり方)、あるいは擬似的な断裂的な技法が目立って巧くいつていることにおいて尖端的な集積回路ではある。しかしこの硬い印象は何なのだろうとも考えた。《この世には／闇は煮える／蟬の脱け殻の形で／地球も》(《地球も》末尾、『蜂蜜採り』より)例えば火や闇がくつきりと感じられる山の旅の途上で、どちらかといえば冷静な感覚で風景を捉える。

荒川の詩集も同じ印象で、やはり言葉によって緻密な回路を作ることと専念する作者の像が見える。ぼーんと投げ出したようなユーモアや、不用意に見える言葉がない。射程距離が正確であればあるほど、逃げ出す言葉がある。システムの強度を反映することの幸不幸がないまぜになっている。

(一九九二年一月十三日号)

性交からずり落ちていくもの

——伊藤比呂美＋上野千鶴子『のろとさにわ』(平凡社)

伊藤比呂美が詩を書いて「のろ」の役割を演じ、上野千鶴子がエッセイで「きにわ」

の役を演じているというこの本。湿っぽさがないなあ、と感じる。上野の本を読んだとき恥ずかしながら、すこしたじろいだ記憶がある。伊藤比呂美の詩とは長年のつきあいだから、すーっとこちらに入ってくる。「性交」「オナニー」「排泄」「マゾヒズム」等々、話題は豊富だが、闇のへの志向のようなものでも、この二人にかかれれば湿っぽくなくなってしまう。

上野によると《発情は「自然」だが、レンアイは「文明」である》と要約されてしまったりする。こういう概念化の波打ち際で踏みとどまるのが、詩の方法だろう。

粘膜の細胞は個人個人まったく固有のもので、愛の摩擦は微視的にみれば、固有の感覚だろう。そこからしてみても、この「きにわ」に「のろ」がいつくのはよくわかる。その後、上野の文章については「わかりました。その調子で自由にやってみてください」という感じになった。

批評を手ごわいなと感じるのは、文章が内容の氷山の一角であると思われるときである。上野の文章はどこどころの「ささくれだち」によって、「たじろがせる」。伊藤の詩にも似たようなところがあるのだが、概念に回収されない形式だけに、生で伝わってくるところがある。波打ち際から波が引いた後、ハードロックコンサートの後にとどころに爆竹の燃えかすが残っているように、なにか点々と残っている。僕の経験を書

くと性行為とは別に、女性の目からの光に自分の体が射し貫かれた感じを持ったことがある（たぶん幻想でしょうが）。観念的には一日のかかなりの部分を猥褻なことを僕も考えているのだけれど、街を歩くように女と男の間を手ぶらで歩いてみて、何か見たことのない景色があることを無意識に望んでいる。上野の場合には文章の「さきくれ」が、伊藤の場合には場面の転換の流れが女性的で色気のある本だと思うと言ったら袋叩きでしうか？

（一九九二年二月十日号）

新しく「掘る場所」

——吉本隆明・「ジライヤ」

吉本隆明『甦えるヴェイユ』（JICC出版局）を読んでいる途中で、「現代詩手帖」の瀬尾育生との対談も読むことになった。初期ヴェイユと現在の世界状況、また資質的に神の考察に向かった「いたましいヴェイユ」（『甦えるヴェイユ』あとがき）の思想が宮沢賢治の引力と同じような引力をもっていること、そしてそれらが吉本思想と有機

的に結びついていることがよくわかる。対談では昨年から議論になっている「湾岸戦争詩」の問題から（これはすでに昨年十月に発行された「ミッドナイト・プレス」十号のインタビューでも言及していた）、宮沢賢治の詩から考えられはじめる、音声・文字以前の言語Ⅱ普遍言語の問題まで語られている。ヴェイユの思想の振幅と、『宮沢賢治』（筑摩書房）における「なんでもない人は菩薩に値する」という賢治の思想に対する批評的観点と羅須地人協会などのいたましい実践との振幅、そして賢治の言葉の原生的な様態、吉本の言語論はより興味深い展開を見せそうである。なによりも宗教も射程においた人間の心的現象の全円的な捉え方に注目したい。

福間健二のやっている雑誌「ジライヤ」九号に注視すべき二人の詩人の詩が載っている。それは辻仁成の連作詩〈砂丘〉と布村浩一の二つの詩だ。布村の〈ぼくのお城〉という作品の始まりは『ばびぶぽ／ぼくのお城はがたがただ』という行だ。最終行は『ぼくのお城はこわれるぞ』である。布村の詩にはとても繊細でそれでいてラディカルな喩法があつてとても魅力的だ。辻の詩ののびやかさ、視点のあり方は現在「掘る場所」を鮮明に表わしていると思われた。多賀恭子『夜の水』（紫陽社）が掘っている場所は最近よくお目にかかるが、普通の恋愛や勤めなどを経て、東京の巷をみる視線をそのまま外国にもっていったような遊山（よくある！）もまぜた詩をゆっくり書き始める女性